

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

縦横無尽

タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(13) :

タテ系の張力と織機の型式3 : 腰機1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5216

縦横無尽

タテとヨコのフィールドワーク 13 色とかたち

吉本 忍

タテ糸の張力と織機の型式3

腰機 1

腰と足を使う腰機

腰機は腰を使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機である。ただし、そうした腰機のうちには、タテ糸に張力を付与するために腰とともに足を使う腰機と、腰とともに棒を使う腰機がある。今月号では、このような腰機のうち、腰とともに足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機について紹介する。

腰と足を使ってタテ糸に張力を付与するということは、タテ糸の一方を織り手の足、他方を織り手の腰でひっぱるることによって、タテ糸の張力が生みだされるということであり、機織り作業において、タテ糸の張力は必要に応じて織り手の腰と足の動きにもなっており加減される。

このような腰機は、これまでに東アジア、東南アジア、南アジア、ミクロネシア、および南米で使用されてきたことが知られており、それらの使用民族としては、中国の海南島に住む黎族、台湾原住民族のうちの台湾本島に住むタイヤル人やアミ人をはじめとするブヌマ人以外の民族、ラオスとベトナムに住むカトウ人、タオイ人、アラク人、ベトナムのステイエン人、インドネシアのイリアン・ジャヤ（ニューギニア島西部）の北海岸に住むソバイ人、インド東北部のナガランド州やマニプル州に住むサンタム人やセマ人をはじめとする諸族、ネパールのドルボ人やライ人、ミクロネシアのファイス島民、ペルーのケチュア人などがあげられる。

アジアと南米の腰機

さて、腰と足でタテ糸の張力を付与する型式の腰機の使用地域と使用民族について、わたしがこれまでに把握しているのは、さきに述べたとおりであるが、個々の民族のもとでもちいられている腰機は様々ではなく、織られている織物についてもさまざまな違いが認められる。したがって、以下では、そうした違いのあきらかな事例を取りあげ、それぞれの腰機と、それらの腰機で織られている織物の概要を列記する。

黎族の腰機

中国の海南島南部に住む黎族が使用する腰機（写真1）は、整経方式が輪状整経式である。1990年に黎族の村で調査したさいの腰機のおもな構成部品には、先端棒（タテ糸保持具）、手元棒（タテ糸保持具／2本1組）、腰当、輪状綜統、開口保持棒（中筒）、開口補助板（紋組織用のタテ糸すくい板）、タテ糸整列具（タテ糸整列板1本とタテ糸整列棒1本）、緯人具、緯打具があり、織り手は先端棒の両端を左右の足の裏で保持し、手元棒の両端につなげた腰当を介してタテ糸の張力を加減していた。また、その腰機では、女性用の筒型スカートの布素材となるタテ縞にヨコ糸浮織（縫取織）技法を併用した、織幅が40センチの木綿の紋織物が織られていた。

タイヤル族の腰機

台湾中部の東海岸に住むタイヤル族のあいだで使われている腰機（写真2）は、整経方式が輪状整経式である。1994年に台湾東海岸の太魯閣で調査したさいの腰機のおもな構成部品には、先端具（タテ糸保持具）、手元棒（タテ糸保持具）、腰当、輪状綜統、開口保持棒（中筒）、タテ糸整列棒、緯人具、緯打具があり、織り手は床に置かれた大きな割れ目太鼓状の先端具の両端を左右の足の裏で保持し、手元棒の両端につなげた腰当を介してタテ糸の張力を加減していた。また、その腰機では苧麻糸を使って、衣料素材となる織幅が45センチのタテ縞織物が



写真2 タイヤル族の腰機による機織り（台湾、太魯閣：1994年）



写真1 黎族の腰機による機織り（中国、海南島：1990年）



写真4 カトウ人の腰機による機織り（ラオス、フアイフン村：1997年）



写真3 アミ族の腰機による機織り（台湾、花蓮：1994年）



写真7 セマ人の織り習い用腰機による機織り（インド、ナガラランド州ビケ村：1997年）



写真8 ケチュア人の投石紐用腰機による機織り1（ペルー：チンチェロ：1999年）

写真5 サンタム人の織り習い用腰機による機織り1（インド、ナガラランド州、アンガムバ村：1996年）



写真6 サンタム人の織り習い用腰機による機織り2（インド、ナガラランド州、アンガムバ村：1996年）

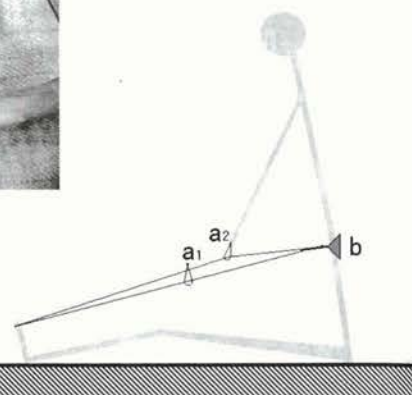


図1 ケチュア人の杖状織物用腰機の織機構造
a1～a2 輪状綜統（糸綜統）
b 腰当（腰紐）

ラオス南部、およびその地域に隣接するベトナムに住むカトウ人のあいだで使用されている腰機（写真4）は、整経方式が輪状整経式である。1997年にラオス南部のファイフン村で

カトウ人の腰機

の先端棒、手元棒、紋綜統の綜統棒、開口保持棒には、ビニールパイプが使われていた。

台湾南部の東海岸に住むアミ族の腰機（写真3）は、整経方式が輪状整経式である。さきのタイヤル族の調査の前に台湾東海岸の花蓮で調査したアミ族の腰機のおもな構成部品には、先端棒（タテ糸保持具／2本1組）、手元棒（タテ糸保持具）、腰当、輪状綜統（地綜統と紋綜統の2本）、開口保持棒（中筒）、タテ糸整列棒、緯人具、緯打具があり、織り手は2本の先端棒の両端を左右の足の裏で保持し、手元棒の両端につながれた腰当を介してタテ糸の張力を加減していた。この腰機では、ウールの糸糸を使用

して、ヨコ糸浮織（縫取織）技法による織幅が19センチの紋織物が織られていた。なお、腰機の構成部品は本来はすべて木製であるが、腰機の先端棒、手元棒、紋綜統の綜統棒、開口保持棒には、ビニールパイプが使われていた。

インドのナガラランド州に住むセマ人の一般的な織機は、前記のサンタム人と同型式の腰機であり、整経方式は輪状整経式であるが、女の子たちが織り習いに使用している織機は、腰と足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の小型の腰機である（写真7）。1997年の正月元日に州中部のビケ村でおこなったセマ人の織り習いの腰機は、整経方式が平整経式で、腰機の構成部品としては、先端棒（タテ糸保持具）、手元棒（タテ糸保持具）、腰当（腰紐）、開口補助板（タテ糸すくい板）兼緯打具があるのみで、綜統や開口保持具（中筒）などの開口具は用いておらず、この腰機ではウールの糸を使って織幅が2センチの紐状織物が織られていた。

セマ人の織り習い用腰機

インド東北部のナガラランド州に住むサンタム人の一般的な織機は、腰とともに棒を使用してタテ糸に張力を付与する型式の腰機であり、整経方式は輪状整経式であるが、女の子たちが織り習いに使用している織機は、腰と足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機である（写真5、6）。1996年12月から翌年の1月にかけてナガラランドでフィールドワークをおこなったさいに、州中部のアンガムバ村で調査したサンタム人の織り習いの腰機は、整経方式は平整経式であった。また、構成部品としては、先端棒（タテ糸保持具）、手元棒（タテ糸保持具）、腰当（腰紐）、輪状綜統、開口保持棒（中筒）、緯人具、緯打具があり、この腰機ではウールの糸を使って織幅が2センチの紐状織物が織られていた。

調査したカトウ族の腰機の構成部品には、先端棒（タテ糸保持具／2本1組）、手元棒（タテ糸保持具／2本1組）、腰当、輪状綜統、開口保持棒、開口補助棒、伸子、緯人具、緯打具があり、織り手は2本の先端棒の両端を左右の足の裏で保持し、手元棒の両端につながれた腰当を介してタテ糸の張力を加減していた。この腰機では、ウールの糸糸を使用して、織幅が80センチの木綿のタテ縞織物が織られていた。

写真10 石寨山遺跡出土の貯貝器の上部を飾る機織り女などの群像（雲南省博物館蔵）



写真9 ケチュア人の投石紐用腰機による機織り2（ペルー：チンチェロ：1999年）

ライ人の細幅織物用腰機

ネパールの東部に住むライ人のもとでは、タテ糸を織り手の腰のうしろと足の親指にかけ渡し、腰と足の親指を使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機がもちいられていることが、Susie Dunsmoreによって紹介されている[Dunsmore 1993:86-87]。この織機もまた腰と足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機（図2）であり、この腰機では背負い袋の紐として使われる織幅10センチ程度の細幅織物が織られている。ただし、この腰機の報告としては、1枚の写真と簡単な記述があるのみで、整経方式は輪状整経、擬似輪状整経、結節輪状整経のいずれであるのか不明である。また、構成部品には2枚の輪状綜統があり、それらを交互に引き上げることによってタテ糸の開口と逆開口がおこなわれることがあきらかにされているにすぎない。

ケチュア人の細幅織物用腰機

ペルー・アンデスのケチュア人のもとでは、今年の3月号（276号）で紹介した枝状織物を織るために使われている腰機のうち1型式と、5月号（278号）で紹介した投石紐の中央部の石を受ける部分を織るために使われている腰機の2型式が、腰と足を使ってタテ糸の張力を付与する型式の腰機であり、これらの腰機の整経方

図2 ライ人の細幅織物用腰機の織機構造
a1～a2-輪状綜統（糸綜統）

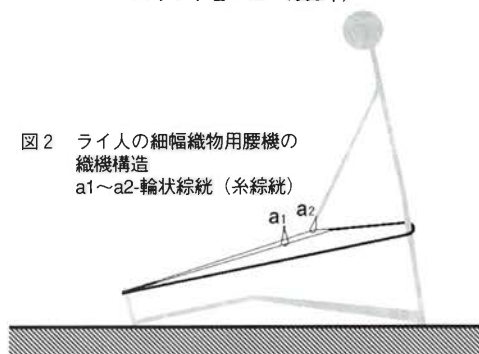


図3 貯貝器の上部を飾る機織り女像の1例

式は、いずれも平整整経式である。また、これらのうち枝状織物を織るための腰機（図1）の構成部品としては、腰当（腰紐）と2つの輪状綜統（糸綜統）と緯入具兼緯打具としての針があるのみである。また、投石紐の中央部を織るための2型式の腰機の構成部品については、一方（写真8）が腰紐（タテ糸保持具）のみで、他方（写真9）は先端棒（タテ糸保持具）と腰紐（タテ糸保持具）のみである。

以上では、腰とともに足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機を10種類ほど紹介したが、冒頭に述べた民族のうち、タオイ人、アラク人、ステイエン人、ソベイ人、フェイス島民などの腰機は、基本的に黎族やカトウ人の腰機と同型式である。ただし、フェイス島民の腰機については、子供たちの織り習いの腰機である。また、ドルボ人の腰機についての情報は、前記のSusie Dunsmoreの写真[Dunsmore 1993:167]にもとづくもので、この腰機は黎族やカトウ人の腰機と同型式と見られるが、整経方式については輪状整経ではなく、擬似輪状整経、あるいは結節輪状整経の可能性もある。

雲南出土の機織り女像

腰機は世界の広範な地域に分布しているが、

細幅織物を織るための腰機を除くと、その分布は環太平洋とその周縁地域に限定され、そうした腰機をもった機織り文化の起源について、わたしは中国と新大陸を想定している。また、今月号で紹介してきた腰と足を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機は、細幅織物を織るための織機以外は、いずれも整経方式が輪状整経式であるという特徴が見いだされる。したがって、これらの腰機を、構造・機能論的な視点、あるいは生産性にもとづいて考察するならば、基本的に長い織物を織ることができないことや、織り手の腰と足の両方に負担がかかるなどの理由から、前記の黎族の腰機をはじめとする腰と足を使ってタテ糸に張力を付与するとともに、整経方式が輪状整経式の腰機の型式は、腰機の原初的な型式のひとつであると考えることができると。また、腰機の型式をほぼ特定することのできるものとも古い考古資料としては、中国雲南省の石寨山遺跡や李家山遺跡から出土した、紀元前2世紀頃のものと思われる腰機をもった機織り女像（写真10、図3）が知られている。これは貯貝器（貨幣）としてもちいられていた子安貝を収納していた青銅器の上部を飾る青銅製の装飾群像のうちに見いだされるもので、その腰機の型式については、整経方式が輪状整経式、擬似輪状整経式、結節輪状整経式のいずれであるのか特定することはできないものの、前記の黎族をはじめとする整経方式が輪状整経式の腰機の類型であることは間違いなく、腰と足を使った腰機の歴史が紀元前にまでさかのぼる古い型式であることがあきらかになっている。

（国立民族学博物館民族文化研究部教授／

よしもと・しのぶ）

文献

Dunsmore, Susie

1999年, *Nepalese Textiles*, British Museum Press.

吉本 忍

1995年「日本とその周辺地域における機織り文化の基層と展開」、『生活技術の人類学』、平凡社。